

いのち
生命のにぎわいとつながり

No.80

令和6年1月

特定外来生物・アライグマについては、過去の生物多様性ちばニュースレターでも、No.9、No.63と二度にわたって取り上げてきました。今回は、そんなアライグマが水辺の生態系に与える影響について、ニホンイシガメと二枚貝への被害を題材に特集します。

アライグマによる水辺の生態系への影響



若いアライグマ (写真右下の数字は、撮影者の^{いのち}生命のにぎわい調査団団員ID)

見た目がかわいらしいアライグマは、1970年代以降、人気アニメの影響もあり、多くの個体がペットとして流通しました。しかし、実際には成長すると気が荒くなり、飼育も難しいことから、遺棄されたり逃げ出すケースも後を絶ちませんでした。野外に定着したアライグマたちは、日本に昔から暮らしている在来の水辺の生き物に、深刻な影響を及ぼしています。

CONTENTS

- 1 アライグマによる水辺の生態系への影響 1
- 2 生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました 3
- 3 千葉県の希少種（キンブナ） 4

◎アライグマとは

アライグマ (*Procyon lotor*) は、もともとは北米に広く分布する、食肉目アライグマ科の中型哺乳類です。

外見はタヌキやアナグマに似ていますが、尾の縞模様や、5本の指が発達していることなどから識別できます。雑食性で、小型の哺乳類や爬虫類、両生類、魚類、ザリガニなどの甲殻類を含む動物から、果実などの植物まで食べます。基本的に単独性ですが、生息密度が高いとゆるやかな社会性がみられます。春に3～6頭の仔を産み、1歳から繁殖します。寿命は、北米の野生個体のデータでは、長寿の個体は13～16歳、通常は5歳未満とされています。昼間活動することもあります。主に夜行性で、人目を避ける傾向があるので目撃することは少ないです。森林や農耕地、市街地など幅広い環境に生息しています。木登りも泳ぎも得意で、もともとは木のうろなどを巣にしますが、市街地では屋根裏に住み着くこともあります。このように様々な環境に適応できるため、日本だけでなくヨーロッパ諸国や、ロシア沿海州などの地域にも外来種として侵入しています。

日本で最初に野生化が報告されたのは、1962年の愛知県とされます。その後、1977年にアニメが放映され人気を博すと、原産地の北米から大量に輸入され、1980年代後半をピークに幼獣がペットショップで販売されました。しかし、成獣になると攻撃的になり、飼育が難しくなるため飼育放棄による遺棄が相次ぎ、また、力が強く手先も器用なことから飼育檻を破壊して脱走することもあり、やがて野外に定着してしまいました。そして、2005年には特定外来生物に指定され、2006年には全国から生息情報が寄せられるようになりました。

千葉県では、1990年代より野外で目撃され、1990年代後半に繁殖が確認されるようになりました。平成15(2003)年度から県による有害鳥獣捕獲が開始され、翌年度には100頭を超える程度だった捕獲数は、近年になり急激に増加し、令和4年(2022)度には1万頭を超えました。農業被害も深刻ですが、生態系への被害も大きな問題となっています。

◎ニホンイシガメへの影響

多くのカメにとって、アライグマの侵入は大きな脅威です。2008年頃になると、房総半島を流れる小河川において、アライグマに襲われたと思われるニホンイシガメの大量の死骸や負傷個体(図1)が発見されるようになりました。



図1. ニホンイシガメの負傷個体(前肢が欠損している)

本来、ニホンイシガメは若齢期(卵や幼体)に様々な捕食者(例えば、イタチ類、シマヘビ)に食べられますが、成体には天敵がいませんでした。しかし、アライグマによって卵から幼体、本来は天敵がいなくても成体までも食べられてしまうことから、ニホンイシガメの個体数は急激に減少しています。メスは成熟までに10年ほどかかる上に、ほとんどの個体が成体まで生き残れないため、一度でも個体数が減少すると回復させるのは困難です。近年、アライグマの侵入に伴ってニホンイシガメが減少した地域では、自生のノイバラに覆われた浅瀬でカメたちが集団越冬していることが分かってきています。そこで、捕食を免れるための隠れ家が消失しないよう、バラを刈り残す等の環境整備を進めている団体もあります。

河川やため池等の周辺でカメの大量の死骸や負傷個体を発見された際は、近くにアライグマの痕跡(足跡等)がないか探してみたいかがでしょうか。

◎二枚貝類への影響

水辺の生き物に対するアライグマの影響は、貝類にも及んでいます。図2は県内の川で見つかった二枚貝類の殻です。殻の縁が噛み砕かれ、中身が食べられてなくなっています。アライグマは手先が器用なため、川の中を歩きながら手で貝を掘り当て、食べているのだと考えられます。この貝殻が見つかった川では、同じように縁が欠けた貝殻が川底や川岸に無数に転がっていました。

淡水生の二枚貝類は絶滅が危惧されている種類も多く、アライグマの侵入はそうした二枚貝類の個体数の減少をさらに加速させてしまう可能性があります。また二枚貝類は、川底の安定性向上や水質の浄化など川の環境を整える働きがあり、川底に住む小さな生き物の隠れ家になったり、タナゴ類の産卵にも利用されています。そのため二枚貝類の減少は、河川環境の悪化や他の生き物の減少にもつながるおそれがあります。川の中での出来事ですので、普段はあまり気づきにくいところですが、もしかしたら

身近な川でもそうした変化が起こっているかもしれません。



図2. アライグマに食べられた二枚貝類の殻

◎生き物の異変を察知する

原産地でも水辺に暮らしていた、アライグマ。その捕食者としての能力は、想像を超えるものでした。日本にはアライグマのような生態の動物が存在しなかったため、ニホンイシガメや淡水生の二枚貝類は対抗手段がなく、被害を受け続けています。他にも、県内ではトウキョウサンショウウオやカエル類に対する被害も知られています。水辺の生き物の異変があった時は、アライグマなどの外来種の侵入や増加の影響かもしれません。日頃から生き物の様子を観察し、外来種が侵入した場合は早期発見し対応することが有効です。

(下稲葉 さやか/加賀山 翔一/村井 貴幸
千葉県生物多様性センター)

生命のにぎわい調査団の 現地研修会を開催しました 令和5年11月19日(日)

今回の研修会は千葉県立房総のむら(栄町)で、晩秋の里山に暮らす生き物を観察しました。

当日は、穏やかな晴天に恵まれ、35名の団員にご参加いただきました。植物学の専門家である平田和弘氏(千葉県立房総のむら)を講師に、千葉県の古くからの住居や田畑、雑木林などが再現された園内を散策し、植物や動物、地衣類を探しました。

◎ナラ枯れとマツ枯れ

伝統的な建物が再現されたロケ地としても有名なエリアは素通りし、周辺の樹木を観察します。葉が茶色く変色し、幹の穴からフラスと呼ばれる木くずのようなものが出ているコナラがあります。あたりを見回すと、一部の広葉樹が枯れているようです。

これは「ナラ枯れ」で、カシノナガキクイムシという甲虫が媒介するナラ菌により、コナラやクヌギ、シイヤカシなどの樹木が枯死してしまうものです。また、周辺のアカマツにも茶色く枯れたものが多くみられますが、これは「マツ枯れ」と呼ばれ、カミキリムシ類が媒介するマツノザイセンチュウ(線虫類、外来種)が原因です。どちらも、県内の森林に深刻な被害を与えています。参加者は、平田さんの解説とともに、枯れた樹木や被害の特徴を観察しました。



ナラ枯れ樹木の観察

◎秋の水田の生き物

坂を下り、水田が再現されたエリアに入っていきます。水田では、すでに稲刈りが終わり、田おこしがされていますが、周辺の水路やあぜ、斜面には様々な生き物が暮らしています。



水田エリアの散策

水路をのぞくと、ミナミメダカの群れが泳いでいます。あぜには、アズマモグラがトンネルを掘り起こした跡に、土が盛り上がっています。斜面には、全草に猛毒があることで有名なトリカブトの紫色の花が咲いています。水が抜けた水路の底では、ヒバカリが見つかりました。咬まれると、その日ばかりの命しかない猛毒を持つヘビと信じられていたことが名前の由来ですが、本当は無毒でおとなしいヘビです。

◎住居の近くの生き物

上総の農家が再現されたエリアでは、建物の近くを観察しました。建物の床下の砂地には、すりばち状のウスバカゲロウの幼虫の巣、いわゆるアリジゴクがたくさん見つかりました。下にひそむウスバカゲロウの幼虫が、落ちてきたアリ類などの小さな生き物を捕食するのです。果樹園では、モズが残したはやにえと思われる幼虫が見つかりました。畑では、斜めに横切るタヌキの足跡が観察され、付近のマツ林では二ホンリスかネズミ類がかじったマツぼっくりが無数に落ちています。哺乳類は、なかなか昼間には見られませんが、このような痕跡により近くで暮らしていることが分かります。



上総の農家の床下、アリジゴクの観察

木の手すりを注意深く観察すると、表面に美しい地衣類が観察できました。コアカミゴケが赤い子器を形成しており、よく見るとかわいらしいです。



コアカミゴケ (子器)

今回参加された方から、房総のむらにはこれまで多く来ているけれども、このような様々な生き物があることは初めて知ったという感想をいただきました。人の暮らしのすぐ近くにも多様な生き物が暮らしていること、その身近な自然にもナラ枯れのような危機が迫っていることを知ることができました。

次の研修会もみなさまのご参加をお待ちしております。

(下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター)

千葉県の希少種

キンブナ



(千葉県レッドリスト・重要保護生物B)

キンブナは日本産のフナ類の中では小型で、最大でも15cm程度にしかならない日本の固有亜種です。河川の中流・下流域の比較的流れが緩いところや、水路、池沼等の低層付近に生息しています。

体色が金色を帯びていることが名前の由来となっていますが、関東地方ではキンタロウブナとも呼ばれ、昔から人々に馴染みのある魚です。近縁な仲間としては、オオキンブナ、ナガブナ、ニゴロブナがありますが、分布域はほぼ重なっていません。キンブナは関東地方から東北地方の太平洋側に分布しています。千葉県内ではかつてはほぼ全域に生息しており、特に谷津田の水路などに多く見られました。しかしながら、圃場整備による乾田化や河川改修、休耕田化による水田の消失、農業による水質汚染など、様々な環境悪化により生息地が著しく減少したため、2019年の千葉県レッドリスト改訂において、カテゴリーが「C (要保護生物)」から「B (重要保護生物)」へと引き上げられました。残念ながら今後も減少する可能性が高く、生息環境の保全が望まれます。

キンブナに限らず、里山で普通にみられた生きものは減少しています。これまで保全活動の中心を担ってきた方々は、子供の頃にそういった生きものと触れ合い、慣れ親しんだ記憶があり、かつての環境を取り戻したいとの強い思いがありました。だからこそ熱心に保全活動をしてきたのだと思います。そういった子供の頃の体験を持たない世代は、これまでよりも保全活動への意識を持ちにくいかもしれません。だからこそ、多くの方々に自然や生物多様性について知っていただく機会がより重要になってきています。

(後藤 亮 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No80 令和6年1月15日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター (環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

